

わたしが小学校の低学年の頃のことだったと思います。その日のお天気の予報が、雨が降るかもしれないと出ていたのでしょう。朝、学校に行くのに傘を持って行くことになったのですが、子供用の傘が骨でも折れていたのでしょうか、あいにく使えるものがありませんでした。

大人のものでは大きすぎるし、婦人用の傘は、その頃でも明るい色で、一見してそれと分かるので、子ども心にも気恥ずかしい気がして、黒いコウモリでなければ嫌だと、駄々をこねたのだと思います。母が、婦人用の傘ではあったのですが、緑色のものを出してきて、緑色なら男の子が持ってもおかしくないと言って、それで妥協して持っていったことがありました。

わたしは、当時、常磐線の綾瀬の駅から電車に乗って通学していたのですが、帰りの車内に、その傘を置き忘れてしまいました。予報に反して雨が降らなかったのでしょう。電車のドア近くの手すりに傘をかけたまま、そのことをすっかり忘れて電車を降りてしまったのです。

駅から家に帰る道の途中でそのことに気がついて、帰ってすぐに母に報告したところ、こっぴどく叱られました。そして母は、すぐにその傘を探しに常磐電車の終点の駅、多分松戸駅だったと思いますが、そこまで取りに出かけていきました。

今では、傘一本探すために、わざわざ時間とお金をかけて遠くまで行くようなことはしないでしょう。簡単に諦めてしまっただけで、新しいものを買ってすませてしまいます。しかし、あの頃は傘一本でも大切にしていたのか、それとも、母にとっては、あの傘は特別に大切なものであったのかも知れません。ほかの傘では代えることのできないものであったのかも知れません。きっとそうだったのでしょう。そうでなければ、直ぐに行動に移すようなことはなかったはずです。

結局、その傘は、見つかったのだと思いますが、母が帰って来るまで、随分、長い時間がたったことだけは、今でも印象に残っています。

今日の福音書は、「失われた羊」、「失われた銀貨」のたとえ話です。ルカ福音書の15章には、この2つの物語に続いて、「放蕩息子」の物語と呼ばれている「失われた息子」の物語が続きます。ルカ福音書が、福音、喜ばしい音信(おとずれ)を、どのようなものとして受け止めているか、この15章にはルカの福音理解が描かれていると言って良いと思います。そして、この3つのたとえと物語は、聞くだけで、十分良く分かる物語でもあります。

特に、「放蕩息子」の物語は、教会生活を送っている者であれば、誰もが良く知っている感動的な物語です。天の父なる神さまの、人間に対する愛の物語です。覚えておられるでしょうか。今年の大斎節第4主日に、この物語を読みました。

ある注解書には、この物語について何も解説する必要はない、と書いてあります。ただ読むだけで、この物語が伝えようとしていることが心の中に響いてくる、というのです(『新共同訳新約聖書注解』)。

だから、今日の説教は、余分なことは言わずに、15章全体を読む。それで十分であると言えるでしょう。ラジオの番組で小説を朗読する番組がありますが、あのようによく読んでもらえば、それを聞くだけで心が打たれる。それにつけ加えて何かを解説する必要は全くない。そのような物語です。

「失われた羊」、「失われた銀貨」、「失われた息子(放蕩息子)」、この3つのたとえと物語には、同じテーマが語られています。失われたものが見つかった喜びです。それも、天における喜びです。「大きな喜びが天にある」(7節)、「神の天使たちの間に喜びがある」(10節)と繰り返し述べられています。ここには、神さまの喜びが、語られているのです。

わたしたちは聖書を読んで、聖書の神さまはどのようなお方か、あるイメージを抱くと思います。わたしたちを御心に適うように厳しく躰けて、神さまの義に沿った生き方をどこまでも追求しようとされる審きと怒りの神さまをイメージするのでしょうか。それとも愛の神さま、母親のように自分の身を削っても、心を砕き痛めても、それに耐えてくださる愛の神さま、あわれみの神さまを思い描くのでしょうか。

今日の箇所では語られている神さまは、わたしたちが普段、うっかり見落としているかもしれないのですが、喜びに溢れる神さまです。しかも、その喜びようは尋常ではないのです。友だちや近所の人たちを呼び集めて大盤振る舞いをしてはまだ足りないほどの喜びです。喜びが奔流となってほとばしり出て、天の隅々にまでも溢れて、それでもまだ足りずに、地上にまでも流れ出て、わたしたちのところまで到達するのです。神さまの喜びが最高潮に達して、わたしたちを覆うのです。そのような、喜びが爆発する神さまです。

同時に、ここで語られていることは、わたしたち一人一人のことです。「わたしたち一人一人は、どのような存在なのか。神さまとの関係はどのようなものであるかが語られています。

しかし、わたしたちは、ここで自分たち自身のことが語られているにも拘わらず、それほど実感を持って受け止めようとはしないのではないのでしょうか。普段の生活の中で、自分のことがみんなの話題になっているとしたならば、心穏やかにすませることができません。自分は、どのように噂されているのだろうか。どのように評価されているのだろうか。良く言われているのか、悪く言われているのか、大変、気になることところです。決して無関心ではられません。

ところが、自分が神さまの話題になっている。神さまの関心の的になっている。それにも拘わらず、そのことに気がつかずに毎日の生活を送っているのです。それだけ神さまから遠く離れて毎日を過ごしているという現実があるのです。正に、「放蕩息子」のように好き勝手に生きている。父なる神さまの干渉を嫌い、あたかもすべてを自分で上手くやっていけるかのごとくに思い込んで過ごしているのが、わたしたちの姿ではないのでしょうか。

しかし、神さまはいつまでも待っていて下さいます。わたしたちが、放蕩息子がそうであったように、「我に返る」ことを待っていて下さるのです(17節)。「我に返る」と言うことは、自分が何者であるかということに気付くことです。神さまとの関係に、目が開かれることです。いつも遠くからわたしたちを見守っていて下さる方、いちいち口出しはしないけれども、わたしたちに目を注ぎ続けていて下さる方がおられ

る。その方を知ることです。それが、我に返ることです。ただ待っていて下さるだけではない。天の高みに留まっておられずに、わたしたちの傍らに降りてきて、一緒に地上を歩いて下さった。今も共に歩いて下さっておられるのです。遠くにおられると思っていた方が、最も身近な方であることを知ることです。

その時に、天に喜びが響き渡るのです。そして、この天で起こる喜びが地上でもこだまするのです。そのこだまするところが教会です。教会でなければなりません。

かつて、ある教会のバイブルクラスで、この箇所を一緒に読んだことがありました。そのときに、いろいろな話題が出ましたが、その中で一人の方のことが語られました。心配して下さったのです。その方は、その教会に教籍のある方ですが、今は教会に来なくなってしまいました。クリスチャンホームに生まれて、幼いときから教会に通っていたのです。

ところが、ご自分の人生の中で、大変困難な問題にぶつかった時に、その方が求めていったところは、その教会ではありませんでした。同じキリスト教を名乗ってはいますが、何人か組になって、毎日のように伝道のために熱心に各家庭を訪問して回る、ある新興宗教のような団体に行ってしまったということです。

心の痛む話です。その方が、それで救われているのであれば、それで良いじゃないか、という考え方もあるかも知れません。しかし、それではわたしたちの教会は、そのような時に何の助けにもならないのでしょうか。何の力も持っていないのでしょうか。何の打つべき手を持たないのでしょうか。そのような問いが起こらざるを得ないのです。

そのような問いに対して、今日の福音書は、天における大きな喜びを語るのです。神さまは、わたしたちが何処にいても関心を抱き、ご自分のものと言って下さる。一人一人が神さまにとって、ほかの人では、とって代わることのできない大切な存在だと言って下さる。その神さまのもとに立ち帰る時に、いや、イエスさまが肩に担いで連れ帰ってくださる時に、天に起こる喜びを語るのです。

そして、その喜びを地上において分かち合う時、そこに教会があります。そのような交わりの中で、教会は地上で起こる様々な困難な問題に立ち向かっていく確かな力を与えられるのです。そのような教会になることが、わたしたちに求められていることです。それが教会の宣教です。

わたしたちの教会が、天と地が相呼応して喜びに溢れるような交わりとなることができるよう、導きを祈りましょう。

う。